

活 動 報 告

「中世 毛呂氏史跡散策と出雲伊波比神社 やぶさめ祭り見学」

記 令和元年（2019）11月6日 小川雅愛

■活動日 令和元年 11月3日(日) 活動場所 入間郡毛呂山町 10:40～15:19

■参加者 16名 （会員 12名＋令和2年度入会予定 4名）

■はじめに

今年、11月3日文化の日は入間基地航空祭、飯能祭り、武蔵が丘カントリークラブでの女子プロゴルフ大会等のイベントとムーミンパークややぶさめ祭りや奥武蔵のハイキングへ向かう乗客等で飯能方面の西武池袋線は早朝からどの電車も満員であった。

そうしたなか、目的地の八高線毛呂駅を目指した。予め乗り換えを調べておいた時刻が大被害をもたらした台風19号の影響で大きく変わっていて、集合地点の東飯能駅には予定した時間に半数の方々が到着できないという状態であった。それでも高麗川駅で1時間近く足止めを食ったおかげで、後続の方々とやっと合流、毛呂駅に着いたのは予定の1時間遅れの10時40分であった。八高線は寄居、藤岡間が未だに復旧作業中ということが頭に入っていなかったのが失敗であった。最初からつまずいたが何とか予定していた散策、見学活動はこなすことができた。

やぶさめ祭り見学は5年前の2014年に一回実施しており、二度目になるため、毛呂山町近辺の史跡散策を加えるべく、調べたのが御家人・武蔵武士の毛呂氏の存在であった。なお、「報告」の末尾に「参考・解説」として毛呂氏に関する記事を掲載したので関心をお持ちの方は参照ください。

■散策・見学のコース

毛呂駅——毛呂城跡（山根城跡）の碑—妙玄寺—榎堂（大黒天）—宿場（やぶさめ出発地）—（昼食）—長栄寺—出雲伊波比神社——毛呂駅

■配布資料

①毛呂山町文化財散策マップ ②毛呂山町文化財散策マップ四 ③毛呂氏の解説(A4判—ペラ、両面—地元の先生作) ④やぶさめ資料 (A3判二つ折りカラー) 以上4点
——提供 毛呂山町歴史民俗資料館——

■毛呂氏史跡散策

1. 毛呂城跡

妙玄寺と出雲伊波比神社（臥龍山）の丁度中間地点に城があった。発掘調査で城郭部、堀等の遺構が確認されているが、現在は埋め戻され住宅が建てられておりまったくわからない。山根城の碑で確認するのみ。（町歴史民俗資料館に発掘時の写真がある）

2. 妙玄寺

曹洞宗の寺院、毛呂氏の供養塔・五輪塔がある。天文2年（1532年）毛呂顕繁の夫人が創建したといわれる。毛呂顕繁の母親（毛呂顕季の夫人）創建説もあるが、これは後世の子孫の方の家の系図の違い・解釈の相違があるらしい。（歴史民俗資料館説の顕繁夫人説をここではとる）、毛呂氏一族の墓（供養塔）が多数あったとされるが、現在、宝篋印塔（供養塔）や五輪塔は一カ所の囲いにまとめられている。表面は摩耗が激しく、文字は殆ど読み取れない。この寺の前あたりに初期の毛呂氏の館があったという。



毛呂氏一族の墓（供養塔） 妙玄寺

3. 榎堂（甲子大黒天）～宿場（やぶさめ出陣場）

次に向かったのが妙玄寺からわずかの榎堂。幹線道路脇にあり、注意してみないとわからないが、大きな榎と祠がある。この辺りに鎌倉初期の御家人毛呂季光の墓所があったとされる聖地。甲子大黒天は小さな祠に二体の大黒天が鎮座している。この辺りは毛呂本郷という昔の毛呂郷の中心、やぶさめの出発点の大きな広場をもつ宿が街道脇に設けられており、夕的の3頭の馬と乗り子（射手）は午後ここを発ち、大きな榎を回り、神社に向かう。宿では馬の世話役役員（勢子役？）に毛呂山町名の由来や祭りの事を教えてもらった。当初の予定ではここから長栄寺に行く予定であったが、昼近くになったのでここでランチタイムとした。小さなそば・うどん屋であったが、いきなり16名のお客にも迅速に対応していただき後半の予定をスムーズにこなすことができた。

4. 長栄寺

昼食後、毛呂顕繁が創建したと言われる長栄寺に到着。門構えや立派な鐘楼に名刹の趣を感じるお寺。お寺の裏手には毛呂氏一族の五輪塔や供養塔が多数ある。その一つに顕繁の名の供養塔もあるというが素人では刻印を確認できない。本堂には顕繁の位牌があると

いうも、法要中で本堂を拝観できなく残念である。さらに裏山に入ると毛呂氏の館跡の土塁が良好な状態で残されているようだが、やや危険な場所で、やぶさめ見学に向かう時間も迫ってきたので、今回は断念する。



長栄寺 本堂（毛呂氏創建モニュメント前にて）



長栄寺 裏山に館跡土塁



毛呂氏供奉塔

その他の毛呂氏の史跡では埼玉匠大の西のゴルフ場内に毛呂氏の竜谷山城跡、鎌北湖に向かう途中、大谷木川沿いの大谷木家の土地に「毛呂季光公の碑」が設けられているがいつの日か訪れてみたい。

■やぶさめ祭り（埼玉県指定無形民俗文化財）見学

1. やぶさめについて

出雲伊波比神社についてはネットで調べればわかるので首略するが、ここは毛呂顕繁が神社火災後再建したときに奉納した棟札がある。（町歴史民俗資料館にそのレプリカ？がある。）ここのやぶさめは3月第2日曜日春やぶさめと本日11月3日の秋のやぶさめの年2回開かれる。ここのやぶさめは地域に伝えられてきた祭りとしてのやぶさめで、民俗やぶ

さめと解釈されるものである。かつては埼玉県内で民俗やぶさめ祭りは各地神社で行われていたが、現在は県内2カ所、毎年行われるのは当神社のやぶさめ祭りのみである。全国の著名な神社で行われるやぶさめは武芸を競う流派やぶさめで作法や型をより重視するといわれる小笠原流と実践的な技能を重んじる武田流が主な家元であるようだ。

前に見学した時と同じく大変な人出であり、参加者はバラバラになるのを想定して帰りの集合時間・場所を決め、数グループに分かれて見学した。神社の本殿の柱に向かって右側にやぶさめの矢が3本、左側には当地出身のオリンピック強化スイマー瀬戸大也選手が的当ての中心に描かれているのがいかにも地域のまつりらしいと感じた。

2. まつり



母衣を背負った最初の騎乗姿



烏帽子姿での夕的 騎射

実際のやぶさめは予想の2時よりかなり遅く始まった。騎手は地元の中学3年、中学1年、小学6年の3名であった。二回ほど学校名と名前がマイクで紹介された。二回の衣装替えの後、烏帽子姿のやぶさめの三回の馬場での騎射があった。馬は神経質で、臆病な動物、カメラのフラッシュは馬が暴れて乗り子に危険が及ぶので厳禁と再三注意がある。相当なスピードで走るので的当てはかなり訓練をつまないと無理、短期間で乗り子は技と馬術を習得するのは大変と思う。それにしても見事な騎乗ぶりである。乗り子の幼いが凛々しい姿を見ながら、丁度武士の元服時と同じ年代、元服後は初陣に出なくてはならないことを何となく考えながら眺めていた。今年は毛呂山町でも台風19号で2、3の川が氾濫したとのニュースを聞く。それにも拘わらず予定通り実施された地元の方々のこの祭りへの熱気を感じた。ずっと長く続くことを願いつつ帰路に就いた。

以上 報告の部

今回の担当 C グループ の皆さん

企画協力：大舘、佐野、山本、平野

写真協力：大舘

当日参加協力：関根

●「参考・解説」の部

1. 中世の毛呂氏の出自と活躍

1) 藤原氏を祖とする出自

毛呂氏は藤原氏を祖とする。鎌足が興隆の元となる藤原家は持統天皇の片腕となって摂関家として権勢を築いた不比等以降4家に分かれるが、その中で最有力家の北家（房前）の系統。菅原道真と争った藤原忠平—実頼—斉敏と続く家系の末裔である。斉敏は一方の南家（武智麿）から数えて6代目の藤原道明の娘と結ばれ、この子孫の太宰権守季仲の曾孫が毛呂太郎藤原季光で、源頼朝の側近となり毛呂氏の基礎を築くことになる。

毛呂郷への土着は季光の父 毛呂季清の代である。土着の経緯についてははっきりしないが武蔵七党の丹党と縁戚関係を築き、勢力を拡大したらしい。

2) 鎌倉幕府の御家人 毛呂季光

吾妻鏡によると源頼朝は初め311人の東国武士を率いて幕府の大蔵御所に入った。この中に毛呂季光は源氏一族、北条氏、有力御家人に交じり、頼朝のそばにあったという。

藤原北家の子孫毛呂季光、藤原南家の子孫熱田大宮司季範の娘と源義朝（平治の乱で落命）の長男が頼朝である。そうした縁戚関係と血統の良さでつながっている。高貴な血筋の季光が加わることで幕府の権威を高める役割を果たした。

治承4年（1180）頼朝の武者行列で季光は頼朝のかごの右側を護る役目をしていた。以降建久6年（1195）頼朝の上洛と東大寺、石清水八幡宮、四天王寺の参詣に従う。（ともに吾妻鏡）頼朝のそばには常に季光ありという記述が吾妻鏡に頻出する。

なかでも頼朝の関東御分国8国に西国の豊後を加えた頼朝御分国9か国のなかで、文治2年（1186）、西国の豊後の国司に頼朝の推挙で任命されているのが出色の栄進であった。本人は実際には豊後には赴かず、頼朝の側近として鎌倉に居住した。なお、国司の任命されてからの期間は短かったものとみられる。相模国の住人大友氏が鎮西奉行の守護として豊後に入部しているからである。

豊後は頼朝の叔父で武勇の誉の高い鎮西八郎為朝がかつて活躍した土地。大宰府と並んで九州全域を抑える要の土地として戦略的に重要で頼朝はいち早く支配を強化した。大宰府を含む肥前・筑前・豊前を少貳氏、豊後・筑後・肥後を大友氏 を鎮西奉行とした。後に、豊後の大友氏は蒙古襲来の際には九州の軍勢の総大将少貳氏、副大将大友氏として活躍した。

季光の子季綱とともに頼朝の鶴岡八幡宮の参詣の記述を最後に吾妻鏡から季光関連は少なくなる。頼朝亡き後、幕府内の政争を忌避して毛呂に退いた。承久の乱には子の季綱が参加し、季光は第一線を退いていた。

3) 毛呂顕繁（別名 田幻世庵主）

毛呂顕繁の登場するまで毛呂郷で在地領主の役割は果たしたが、室町時代の結城合戦（1440年）に毛呂三河守の名前があるほか目立った動きはない。

16世紀の毛呂氏は越生の報国寺、安楽寺、医王寺などに対して手厚い保護を加え、毛呂郷の館近くの長栄寺、妙玄寺を創建して、民衆の信仰を援助することで領主として村人

との結びつきを深めた。長栄寺は毛呂顕繁の創建で、位牌（本堂）、毛呂氏の墓、五輪塔、宝篋印塔（供養塔）があり、顕繁の別名がみえるものがある。

永正元年（1504）立河原の戦いに参戦、この戦いの双方の犠牲者は甚大、毛呂氏の“死者は数知れず”との言葉が残されている。顕繁はあまりの多い死者を悼み、念仏鍾 200 個を作り奉納したとされる。大永 4 年（1524）後北条氏に加担した毛呂氏は山内上杉・扇谷上杉連合軍に毛呂城や館を陥落された。城兵は山城の竜谷山城に籠城し、救援を待つ。これを毛呂合戦といい最大の危機であったが、北条氏綱の軍と攻撃軍の和議が成立し、乗り越えた。これ以降毛呂氏は後北条氏に従うことになる。秀吉の関東征伐の小田原攻めの際、氏照の八王子城守備を命じられた毛呂氏は落城と運命を共にし、地頭職としての毛呂氏本家は断絶した。なお大永 7 年（1527）出雲伊波比神社が火災で焼失したが、毛呂顕繁は直ちに再建し、その時の棟札が神社に現存している。やぶさめは勇敢であった毛呂氏の武者振りが色濃く反映されている。のちに毛呂氏一族は徳川家康の旗本となる家系、川越藩藩士になる家系、帰農された家などに分かれた。その他、西国の丹後地方にも毛呂氏の一族の関係地があると言われる。

2. 毛呂山の名称の由来について

町の名称は毛呂氏に由来するように考えがちであるが、毛呂郷が先で、毛呂氏がそこに土着したという。土地名の由来は断定できないことが多いが、毛呂も例外にもれず諸説があるという。出雲伊波比神社がたつ小高い丘 臥龍山に起源をもつ地名とするも不確か。臥龍山についても本日、やぶさめの出発点で地名の由来を聞いた土地の人は埼玉医科大病院の建つ丘であるという。

●参考資料

「毛呂山町史」 毛呂山町歴史民俗資料館 編集「鎌倉御家人 毛呂季光の活躍と末裔たち」
「埼玉県の歴史」（山川出版社） 「大分県の歴史」（山川出版社）
「中世武士団」（講談社学術新書）ほか